

Title	1950年前後の加藤周一： ロマン主義的風土の探究と日本的近代の展望(上)
Sub Title	Kato Shuichi autour de l'an 1950 : recherche du climat romantique et vision d'une modernité japonais
Author	片岡, 大右(Kataoka, Daisuke)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2015
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.61 (2015. 10) ,p.71- 99
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20151031-0071

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

1950 年前後の加藤周一

——ロマン主義的風土の探究と日本的近代の展望（上）

片 岡 大 右

1 回想の中の加藤周一——「象徴主義的風土」の案内人

加藤周一（1919～2008年）は、東京帝大医学部の学生でありながら文学部のフランス文学研究室に出入りして、学生・教師と親しく交わった。やがて1968年の『羊の歌』は、「いくさ」の中にあっても自由な雰囲気をとどめていたこの本郷の「仏文研究室」を、「戦争中の日本国に天から降ってきたような渡辺一夫助教授¹⁾」ともども、一個の神話として後世に伝えるだろう²⁾。そんな加藤が——後にその作品集について、「ほとんど一人の人間の著作集とは考えられぬほど広くさまざまな分野をカバーしている³⁾」と評されるほどに執筆の領域を広げるに先立ち——、敗戦直後からの盛んな著作活動を、まずはフランス文学の研究と紹介によって開始したことに不思議はない。「初期の加藤さんの活動にとって、フランス文学はいわば母港の役割を担うものでした⁴⁾」——菅野昭正は適切に指摘している。

ところで、加藤の仕事はフランス文学の何を論じ、どのように読まれたの

-
- 1) 加藤周一『羊の歌』岩波新書、1968年、184頁。
 - 2) 当時の教員側にいた者として、中島健蔵は『羊の歌』の「善意にみちた」記述に一定の修正を加えている。中島健蔵『回想の文学』平凡社、第3巻、1977年、266～268頁。
 - 3) 木下順二、『朝日新聞』1979年3月18日朝刊11面。
 - 4) 菅野昭正「思いだすまに」、菅野昭正編『知の巨匠 加藤周一』岩波書店、2011年、5頁。

だろうか？ 今日に至るまで、1950年前後（彼は51年10月にパリに留学する）までの著者の成果を代表するものとして記憶されているのは——中村真一郎・福永武彦との共著『1946 文学的考察』所収の一連のエッセーと並び——、論文「象徴主義的風土」である。この論文は、雑誌掲載（『花』1947年11月号）の後、また加藤個人の論集『フランス文学論』（1951年）の巻頭を飾るに先立ち、新潮社の『現代世界文学講座 フランス編』（1949年12月）に収められたことで広く読まれた。東大・京大・慶應の仏文科教員および出身者によって占められた寄稿陣に、「東大医学部卒業・現在東大医学部附属医院勤務」という場違いな著者紹介を掲げて加わった加藤は、また最年少の執筆者でもあった（刊行当時30歳になったばかりであり、大正生まれの書き手は、当時東大仏文科講師だった2歳上の中村真一郎と彼のみ）。本郷の「仏文研究室」との例外的な結びつきによって知られる若い医師によるこの論文は、フランス文学に関心を抱く当時の読者に鮮烈な印象を与えた。ここではさしあたり、1930年代前半生まれの元東大生たちで、「仏文研究室」に学んで研究者となった人々の——それゆえきわめて限定的な性質の——証言いくつかを通して、その点を見ておくにとどめよう。

やがて明治大学を経て母校の「仏文研究室」に戻り、マラルメ研究を中核としつつ、フランスおよび日本の文学について旺盛な研究・執筆活動を展開した前出の菅野（30年1月生まれ）は——「ナチス・ドイツへの抵抗の運動を支えた共和国の精神の特性」を見事に捉えたとして、1951年の岩波新書『抵抗の文学』を称賛するに先立ち——、「ボードレール論、ヴァレリー論、さらに象徴主義文学全般を要領よく俯瞰した論攷『象徴主義的風土』など」の読書の記憶に立ち返って、それらは「フランス文学に関心を向けはじめた初心の読者にとって、信頼に足る手引きになってくれた文章として、忘れがたい」のだと述べている⁵⁾。渡辺守章（33年3月生まれ）も「象徴主義的風土」の重要性を強調している。「20世紀文学のいわば土台となったマラルメの弟子たち」を取り上げ、ヴァレリー、ジード、ブルーストと並び、

5) 同頁。

当時まったくその劇作が翻訳されていなかったポール・クローデルを論じるこの論文こそが、同じ著者による独立したクローデル論とともに、『縞子の靴』の劇詩人への最初の導きとなったというのだ⁶⁾。そしてこの回想は、「ヴァレリーやジード、プルーストに関しては、私の世代の多くのフランス文学専門家が加藤周一先生の手記に『種を植え付けられ』ていました⁷⁾」として締めくくられることで、「象徴主義的風土」の影響の広がり証言している。同様の証言は、清水徹（31年3月生まれ）によってもなされている。「友人の渡辺守章」とヴァレリー研究者としての自身の経験を振り返った後に、彼は「象徴主義的風土」が同世代の仏文研究者たちにおよぼした影響を一般的に語る——「どういうわけか、私の同年配は […]、ヴァレリー、ジード、プルースト、クローデルあたりを研究した人間が多いんですが、おそらくそれは、加藤さんのこの論文の広い目配りとくっきりした分析が根元にあって、私をはじめとした者たちの文学的な勉強のしかたに影響を与えてくれたのではないかと思うんです⁸⁾」。

2 阿部良雄における「象徴主義的風土」の乗り越え

しかもそれだけではない。この論文とその周辺の仕事は、1950年前後の東大生たちを、マラルメおよびその後続世代の文学者たちにのみ導いたのではなかった。マラルメその人の先行世代を読み解く枠組みさえも、そこでは提供されていた。阿部良雄（32年5月生まれ）が『加藤周一著作集』月報のために執筆した「『象徴主義的風土』をめぐって」を読めば、そのことは了解される。このボードレール研究者の証言は、マラルメとその後続世代の研究者となった前出の三人の証言には見られない屈折を明瞭に示しているだけに、いっそう興味深い。阿部は、直接的な影響を語るのではなく、自らの

6) 渡辺守章「私が個人的に加藤周一氏に負うところ——一九五〇年のポール・クローデルの演劇世界の発見」、ジュリー・ブロック編『加藤周一における『時間と空間』』、かもがわ出版、2012年、67頁。

7) 同書71頁。

8) 清水徹・山崎剛太郎「加藤周一の肖像」、菅野編前掲書、186頁。

ボードレール研究の方法選択が、当時圧倒的な印象を与えた加藤の仕事への反応として強いられたものであった次第を説明しているのである。まずはこのエッセー冒頭の一段落を——加藤の一時期の仕事から後続世代が受け取ったものの証言としてきわめて充実したものでありながら、今日さほど広く知られているとは思われないので——、以下に全文引用しよう。

思えば、第二次世界大戦終熄後間もない1950年前後に、われわれの目前に現れた加藤周一氏のいくつかのエッセー、わけても「象徴主義的風土」は、憧憬、いな希求の対象となるべき一つの理想的な精神的風土の本質と相貌を端的に示すマニフェストであり、方法叙説であった。単純な抒情に対する禁欲が、より高次の水準での感情そして官能の繊細な満足へと導くような方法。思念の直接的な叙述を断念することが、観念の誕生という創造的な神秘に立ち会う戦慄的な体験への一步となるような境地。あまつさえ英雄的な捨身の勤業が、homo faberの冷静な計算と操作の正確さを誇る技師の矜持を排除しはしない世界。少年期から青年期へのはざまにあったわれわれがそのような風土の所在を垣間見た時、生れざるを得ぬ旅立ちの決意を促したものとして、さらにそうした精神的風土の像と二重写しになった、秩序・美・豊かさ・静謐・官能性の充溢が生活の水準においても感受され得るような現実社会の像（今にして思えば、フランス第三共和国の成熟期において成立した一個の平衡の像）が、荒廃と無秩序を特徴とするように見えた戦後の社会の中で、ひととき魅力的であったことが追憶される。戦前のフランスを体験した河盛好藏氏や中村光夫氏の文章にもまして、加藤氏がまだ見ぬ国の文学や芸術を語る文章は、われわれの脳裡にいつしか純粹なフランス像を結晶させ、言うならば欣求浄土の旋律を響かせることになったのだと思える⁹⁾。

9) 阿部良雄「『象徴主義的風土』をめぐって」、『加藤周一著作集』月報5、第1巻附録、平凡社、1979年2月、3頁。強調原文。

阿部は、加藤がこの風土の本質の明晰な把握のもとに『悪の華』の詩人を論じた「ボードレールに関する講義草案」1948年初出について、そこに「示される透徹した認識を同じ次元で抜くことは不可能だというのが、三十年前の絶望的な印象であった」と回顧する。「かくも明快な見取り図が提供された場合に可能な選択と私に見えたのは、ことさら木を見て森を見ぬように心掛けること、言いかえれば、加藤氏によって明示されてしまったものがあたかもまだ明示されていないかのように振る舞うこと」であって、こうして彼は、「既知の命題すべてを括弧に入れて、ひたすら現象にこだわる」という方法論的選択を、「余儀なくされる」ことになったのだという¹⁰⁾。先行世代たる加藤周一の明晰を一方に、「英米ついでフランスの新しい批評〔…〕、ひいてはその彼岸の構造主義的思考」に依拠する後続世代の明晰を他方に置いて、「二つの異なった明晰さのはざまに現象の晦暗の中に低迷するオブスキュランティストとしての宿命を、歎かずにはいられないのだ¹¹⁾」と続けられるとき、人間的自由はまさにこの「現象の晦暗」をくぐり抜けることによるのみ獲得しうるものと信じ、実際やがてそのような自由にとどり着くことを得た著者の研究を知る者は、韜晦の背後にほとんど隠されてもいない自負の表現を認めることになる。ともあれここでは、フランス文学の——ひいてはフランスそのものの——真髄をボードレールからマラルメを経てヴァレリーらに至る流れのうちに見て取った上で、そこに一貫するものを「象徴主義」の名のもとに定式化するという枠組みが、加藤のある時期の著作のうちこの上なく明瞭な表現を得て、後続世代の研究者に大きな示唆を与えたという事実を確認しておこう。

そして象徴主義を軸とするこのようなフランス観は、古典主義の規範的価値を覆すことはない一方で、ロマン主義を乗り越えられた過去の遺物とみなす感覚を含み持っていた。実際阿部は、加藤の文学論をこのように捉えた上で、このような枠組みそれ自体から距離を置こうとする意図により、自らはロマン主義という文脈の再評価へと導かれていったのだと回想している——

10) 同5頁。

11) 同5～6頁。強調原文。

「あまりにも理想的な風土への憧憬が昂じて、ついにはそこに棲息し得ぬことの絶望ひいては憤激と化する時、別天地開拓の意欲が生ずることは当然予想されよう。〔…〕今日のわれわれは、ロマン主義に対するヴァレリーのドグマティックな断罪を克服して、たとえばボードレールの詩学や芸術理論を広い意味でのロマン主義の文脈の中で把えようとする¹²⁾」。

『象徴主義的風土』をめぐって」は1979年2月刊行の著作集第1巻に掲載されたが、まさにこの70年代後半の阿部は、ボードレールをロマン主義からの切断と象徴主義の先駆の相においてではなく、前者の展開を通して、そして後者とは別の仕方での現代性^{モデルニテ}の獲得という道筋において読み替える作業に力を注いでいた。すでに1976年、自ら編纂した『ボードレールの世界』のために「ボードレール論の系譜」を著した彼は、30年前の加藤の論考の表題を引きつつ、「詩派としての象徴主義を越えてなお存続する『象徴主義的風土』の中で、高度に精神的な活動としての『芸術』による救いを保証してくれる聖者あるいは『仲介者』たる詩人から、「『現代精神』^{エスプリ・モデルス}の不安と自由をそのまま引受けて生きることを促す詩人¹³⁾」へとボードレール像が転換する過程を、共感を込めて跡付けている。そして『加藤周一著作集』第1巻が年初めて刊行された79年の10月には、大修館書店の『フランス文学講座』第3巻が刊行される。詩を扱うこの巻の企画に阿部は深く関わり、18世紀から19世紀後半までのフランス詩の流れをたどる4つの章を担当して、それをロマン主義の展開として捉える枠組みを強く打ち出している。1970年代のフランスにおけるロマン主義研究の成果、とりわけ1973年に出たポール・ベニシュの『作家の聖別』——77年刊の『預言者の時代』に引き継がれ、やがて『ロマン主義の祭司』(88年)、『幻滅の流派』(92年)とともに巨大な「フランス・ロマン主義の哲学的歴史」四部作を構成することとなるこの決定的著作——を踏まえる第6章・第7章で18世紀から

12) 同6頁。

13) 阿部良雄「ボードレール論の系譜」、阿部良雄編『ボードレールの世界』青土社、1976年、359頁。

1830年代の詩人たちまでを論じた後¹⁴⁾、彼は第8章においてサント＝ブーヴ、ネルヴァルそしてボードレルを扱う。最終節で阿部は、『悪の華』にすでに垣間見られ、やがて『パリの憂鬱』において十全に表れることとなるものを、一方では「サント＝ブーヴの〈内面化されたロマン主義〉¹⁵⁾」として、他方では「秘技伝授的なリアリズム¹⁶⁾」(イヴ・ボヌフォワ)として捉えることで、詩人の象徴主義的側面を相対化する。ボードレルの詩的達成の意義を要約する結末部分を引用しよう——「ここにいたって、詩は韻律や修辭といった art から解放されただけではなくて、詩は〈詩的〉でなければならぬという先入感からも解放された。詩は自由な精神の自由な活動形態と化したのだが、それは、しばしば誤ってそう考えられるように、詩を純粹に美的なもの領域に局限することではない。社会的・道徳的なものまでも含めたいくつもの水準で読者に働きかける行為としての詩。〈象徴派〉の詩人たちは必ずしもボードレルの精神を忠実に継承しはしなかった¹⁷⁾。」続く第9章では、「芸術としての詩」の方向への洗練を推し進めた高踏派の今日における失墜が確認された後、「〈詩〉を〈芸術〉の側から〈人生〉の側へと決定的に引き寄せ¹⁸⁾」ることで今なお多くの読者を得ているロートレアモンとランボーの詩的冒険が、やはりロマン主義詩学の帰結として、すなわち「ロマ

14) 第7章「ロマン派の詩人たち」は、その冒頭に付された注において、「ロマン主義の根本性格に関する本章の分析は、左記のエッセーに負うところが極めて大きい」と明記し、『作家の聖別』を参照することで始まっている(『フランス文学講座 第3巻 詩』大修館書店、1979年、204頁、注1)。それに先立つ第6章「18世紀古典主義とロマン主義の〈革命〉」もまた、発想においても節の表題においても(「ラマルチーヌの登場」、「ロマン主義の〈革命〉」、「シャトブリヤンと『キリスト教の詩学』」)、すでにベニシュのこの著書を参考にしている。

15) 阿部良雄「現代詩の原点」、前掲『フランス文学講座 第3巻 詩』第8章、222頁。

16) 同書232頁。

17) 同書238頁。強調原文。

18) 阿部良雄「芸術としての詩と反=芸術としての詩」、前掲『フランス文学講座 第3巻 詩』第9章、248頁。

ン派詩理念の両極——個人的なるものへの沈潜と、集団的なるものの教導への意欲——¹⁹⁾」の緊張の劇として提示される。こうして彼は、「象徴主義的風土」とは別の風土、ロマン主義的風土と呼ぶことができよう別の環境の歴史的解明を企てたのである。

同時期の月報の文章に戻ろう。阿部はロマン主義再評価という自らの選択を、加藤が見事に定式化した、しかしこの先達に固有のものであるどころか一時代のクリシェに他ならなかったフランス文学史観から身を引き離そうとする努力の所産として提示していたのであり、それゆえ、加藤自身が対独レジスタンスの経験とそれ以後の文学状況に注目し、「もはや『象徴主義的風土』に安住せぬ戦後フランスの詩人」へと視野を広げていた事実を強調しつつも²⁰⁾、彼が19世紀文学に向けた眼差しのあり方を変えていた可能性は、そこではまったく考慮に入れられていない。

しかし実のところ、加藤は1951年刊行の『フランス文学論』、巻頭に「象徴主義的風土」を掲げたこの論集の「あとがき」で、今後の研究の展望について、このように述べていた——「今では、現代フランス文学の深い源が、一九世紀の文学、殊にロマンティスムにあると筆者は考えている。またロマンティスムを越えてもっと前にもあるらしいということも漠然と考えている。そういう考えをはっきりさせ、具体的に追求してゆく仕事はこれからの仕事である²¹⁾。」すでに述べたように、「象徴主義的風土」は初出こそ1947年の雑誌であるものの、1949年の『講座』掲載によって有名になり、その後51年の単著に収められた。それゆえ、「1950年前後に、われわれの目の前に現れた加藤周一氏のいくつかのエッセー、わけでも『象徴主義的風土』という、先ほど引用した阿部の記述は、受け手の側の現実を正確に証言している。しかしこの50年前後、すなわち51年のパリ留学直前の時期は、加藤にとってはロマン主義再発見の時期に他ならなかった。実際、「ロマンティスムを越えてもっと前」についてはともかく、

19) 同書 251 頁。

20) 阿部良雄「『象徴主義的風土』をめぐって」、前掲月報 6 頁。

21) 加藤周一「あとがき」、『フランス文学論』河出書房、1951年、213 頁。

ロマン主義それ自体については、当時の彼は具体的な成果を幾つか残している。しかも、そこで得られた認識に基づき、同じ時期の彼は日本的近代の特質をも見定めようとしていた。周知の通り、56年の帰国後の加藤は、探究の主たる領域をフランスとヨーロッパから日本へと移してしまう。そして以後、日本の文学・美術そして思想を論じる際の彼は、ロマン主義も象徴主義も基準として用いることはない。しかしこの50年前後にロマン主義の再発見を通して得られた枠組みは、今日なお有効な文学史の見取り図を提供しているのみならず、以後の加藤の仕事を読むに当たっても極めて示唆的な論点を含んでいるのである。

3 近代文学史の神学的読解

ロマン主義の積極的評価に転じる以前から、加藤はこの文学思潮を「象徴主義的風土」の引き立て役として用い、その限りで大いに重視していた。「象徴主義的風土」と「ボードレールに関する講義草案」で提示された見取り図は、いたって明快なものだ。ここではそれを、前者に即して見ておこう。まず、象徴主義は、積極的に広い解釈のもとで把握されることにより、「20世紀精神の美学的態度の本質²²⁾」であるとされる。それは全19世紀に対立するのであるが、この世紀は前半と後半に分かたれ、前半を代表するのがロマン主義、後半を代表するのが高踏派と自然主義だという。そしてロマン主義とはルソーであり、ルソーとはプロテスタンティズムである。高踏派と自然主義とはいえば、こちらはルナンに典型的な「自由神学」の芸術的表現に他ならない。ここで加藤が言いたいのは、世紀前半のロマン主義は現実認識を欠いたたんなる感情的な主観主義であり、後半の高踏派と自然主義は、それに対して実証主義的に捉えうる限りでの現実を回復したものの、超越的なものの認識をまったく追放したままにとどまったということだ。このような図式の中で、彼は「象徴主義的風土」の、すなわち20世紀の先駆者として、『悪の華』の詩人を登場させる——「しかし、プロテスタント的・自由神学

22) 加藤周一「象徴主義的風土」、『加藤周一著作集』平凡社、第1巻、1979年、331頁。

的 19 世紀のなかばに、カトリックの詩人、ボードレルは、魂の現実の認識のために不朽の方法を確立した。1857 年は『ボヴァリー夫人』の年であると共に『悪の華』の年として記憶されているのである²³⁾。自由神学的・実証主義的精神に基づくフローベールの小説が経験的現実の記録にすぎないのに対し、ボードレルのカトリック的自然神学は、一方では「浪漫派の注意した魂の現実」を見据えつつ、他方ではそれを超越的な「宇宙秩序の現実」と一体的に把握することで²⁴⁾、カトリシズムの甦りとして定義される 20 世紀を準備したのだという。

こうして「象徴主義的風土」は何より、カトリック的・自然神学的風土の現代における復活として把握されている。それがマラルメを経てヴァレリーとジードに受け継がれた次第がどのように論じられているのか、また——クルティウスを参照することで——プルーストとクロデルの文学的営為がいかにしてこの風土と結びつけられているのかをたどり直す必要は今はない。ここではただ、20 世紀の重要な文学思潮の本質の提示において見事な加藤の議論が、ルソーやフローベールの理解においてあまりにも平板であること、その平板さの原因はカトリックの自然神学を特権化する立場からなされる近代文学史の神学的読解という「独自性²⁵⁾」にあり、「こうしたカトリック史観による 19 世紀思潮の解説は今日ではもはや通用しないだろう²⁶⁾」ことを確認しておけばそれでよい。いや、当時からすでに十分に説得的なものだったのかどうか。実際、「象徴主義的風土」の影響の大きさを振り返ってみせる誰も、加藤の議論のこの側面には触れようとしないのである。

4 ロマン主義の展開としての近代文学

「浪漫主義の文学運動」は、1951 年 2 月に筑摩書房から刊行された『文学講座 IV 文学運動』に収録された。執筆時期は不明だが、いずれにせよこ

23) 同書 334 頁。

24) 同書 335 頁。

25) 海老坂武『加藤周一——20 世紀を問う』岩波新書、2013 年、46 頁。

26) 同書 47 頁。

れは、1947年に「戦争中の読書の感想を整理して²⁷⁾」書かれた「象徴主義的風土」からわずか数年後の著作である。しかしここでのロマン主義は、以前の著作におけるのとはまるで異なった相貌のもとに現れる。それはもはや、18世紀末から19世紀前半に展開した後に他の文学的潮流——リアリズム、自然主義、象徴主義——に取って代わられる定めの一文学思潮にとどまるものではない。それは近代文学の運命全体と結びつけられる。「近代文学とは、要するに浪漫主義の展開²⁸⁾」である。

すべてがルソーから始まるのは、かつてと変わらない。しかしこのスイス人は、もはやプロテスタンティズムとの関係で語られるのではない。そもそもこの論考の全体を通して——仏独英の比較が問題になるのにもかかわらず、そしてラムネーの重要性が指摘されるのにもかかわらず——、キリスト教とその諸宗派を指し示す語彙は、カトリックであれプロテスタントであれ、完全に不在だ。1947年にはルソーを媒介として、ロマン主義とプロテスタンティズムの連関が強調された。神学的な解説格子をお払い箱にした1951年には、同じ著者を媒介とすることで、ロマン主義はフランス革命との連関のもとに置かれる。『新エロイズ』と『告白』の著者が同時に『社会契約論』の著者であった事実を傍証として用いつつ、加藤はロマン主義の展開としての近代文学を、革命以後の政治的・社会的現実と不可分のものとして捉えるのである。ルソーは、「個人の自由の実現の場所として、具体的な歴史的社會を考へる」ことで、超歴史的な与件としての人間的自由に依拠したデカルトの古典主義的人間観を離れた²⁹⁾。しかしそのことは、この思想上の転換に対応する歴史的現実が、すでに存在していたということを意味するのではない。「彼は、市民社會を予言したのであって、市民社會のなかに住んでいたのではなかった³⁰⁾」。こうして、個人の自由の開花する場としての市民社會を望見し、そのために必要な制度構築の提案を行う同じ人間が、孤独な散歩者の

27) 加藤周一「象徴主義的風土」、前掲書362頁（『著作集』のための「追記」）。

28) 加藤周一「浪漫主義の文学運動」、前掲『加藤周一著作集』第1巻、282頁。

29) 同書283頁。

30) 同書284頁。

夢想に身を浸すこととなる。ルソーのこの両面性は、バイロンによっていっそう激烈に生きられるに至るだろう——「自意識の世紀病と人権主義の情熱」、それこそが「浪漫主義の本質的なもの」なのだ加藤はいう³¹⁾。

ロマン主義を近代の文学と社会全体との関係で捉えるこのような議論の過程で、この論文は中島健蔵の所説に依拠しつつ、それを重要な点で補完する。「ロマンチック以後、極めて最近までを、一貫して一つの文学的時期とみ³²⁾」ることの必要を説く中島の議論を、加藤による引用に即して要約するなら、以下ようになる。「大ブルジョアジー制覇の時期³³⁾」に発展した新しい文学は、かつて古典主義が貴族社会の文学理論となりえたようには、この新興階級と良好な関係を取り結ぶことができずに、かえってそれと激しい敵対関係に入った。ロマン主義以後、文学者たちが活動の基盤として頼りえたのは、「彼等自身によって蔑視されていた浮動的な小市民³⁴⁾」でしかない。こうして、ロマン主義に始まる近代文学は「藝術のための藝術³⁵⁾」の道に向かい、「政治的な支配力から離脱した³⁶⁾」「文学王国建設³⁷⁾」を進めたのである。

中島のこの見取り図を、加藤は承認する。そしてここで提示された動向の到達点がどのような形を取るのかを例示すべく、「(たとえばフロバール Flaubert)³⁸⁾」と書き添える。それにより彼は、もはや1947年の論文で自らが打ち立てた、1857年の二重性の仮説——『ボヴァリー夫人』の年であるとともに『悪の華』の年であり、しかもこの二つは鋭い対立関係において理解されるべきだという——を放棄し、両者をともどもに、何らかの仕方でロマン主義の精神的冒険を引き継ぐものとして理解するに至ったことを示唆してみせるのだ。しかしここではさらに、加藤が中島の見取り図を補完すべく

31) 同書 294 頁。

32) 同書 295 頁 (中島健蔵『ロマンチックについて』高桐書院、1948 年、109 頁)。

33) 同書同頁 (中島同書同頁)。

34) 同書 296 頁 (中島同書 110 頁。「蔑視」の前に「時には」)。

35) 同書同頁 (中島同書 115 頁)。

36) 同書同頁 (中島同書 114 頁)。

37) 同書同頁 (中島同書同頁)。

38) 同書 297 頁。

付け加えている要素に目を向けなければならない——「敢えて蛇足を加え、無学を顧みずに、中島氏を補足しようとするれば、浪漫主義は文学者の社会的孤立の第一歩を踏み出したのではあるが、孤立を完成したのではなかったといえよう。また別のことばを用いれば、彼らは、本質的には、そのような第一歩を踏み出したのであるが、主観的意図としてはそのような一歩から逆の方向へ踏みだそうとしていたのだともいえるだろう³⁹⁾。」彼は近代文学の展開のうちに「文学王国」の建設に向かう動きを認めつつも、その歩みが単線的なものではなく、屈折を伴うものだった事実を強調する。そしてこの屈折が、一面では文学者たち自身によって望まれたものでもあったのだと主張するのである。

彼によれば、文学者たちは「浮動的な小市民」と、また広く人民大衆と、たんに強いられた交わりを余儀なくされたのではない。復古王政下に王党派として出発したロマン主義者たちは、20年代後半を通して思想的立場を変化させていき、1830年、劇場における『エルナニ』の成功を春に見たこの年の7月、彼らは革命化した小市民と労働者の側に立つに至る。たしかに、銀行家の支配を帰結したルイ＝フィリップの治世にあって、「反動の渦中で、小市民はさまざまな方向に『浮遊』し、浪漫派は退いて『文学王国』の建設へ向う」。しかし彼らは、加藤の強調するところでは、「全く退いてしまったのではなかった⁴⁰⁾」。1848年の新たな革命を準備したこの時代の知的沸騰を、加藤はバルザック、ラムネー、ベランジェへの言及の後、何よりもミシュレによって代表させる。つねに民衆とともにあろうとしたこの歴史家の精神、「ミシュレーの浪漫主義」は、1870年のパリ・コミュン以後も、ドレフュス事件におけるゾラ、第一次大戦におけるペギー、両大戦間期におけるロマン・ロラン、第二次大戦とレジスタンスにおけるアラゴンへと、受け継がれてきたのだと加藤はいう⁴¹⁾。それはすなわち、筑摩書房の『文学講座』が彼のロマン主義論を掲載したのと同年に刊行された岩波新書の主役たち、あの

39) 同書 296～297 頁。

40) 同書 299 頁。

41) 同書 304 頁。

レジスタンスの詩人たちの営みの意義が、当時の加藤にあって、「象徴主義的風土」からの脱却としてのみならず、いわばロマン主義的風土への回帰としても理解されていたことを意味する。「文学王国」の建設は、何らかの仕方、地上の共和国回復の冒険を準備していたのである。

5 ロマン主義論の二源泉 (1) ——渡辺一夫

加藤周一はどのようにして、19世紀以降のフランスおよびヨーロッパの文学と思想を読み解く際の参照軸を、象徴主義からロマン主義へと移行させたのだろうか？ 様々な理由があろうが、確実に指摘できるのは、渡辺一夫がゴーチエの回想録の翻訳を通して試みたロマン主義評価からの示唆であり、また加藤が戦争中に親しみ、戦後に渡辺とともに紹介作業を行った、ジャン・ゲーノの19世紀観の影響である。加藤のロマン主義論の二大源泉と言えるこの二人の仕事は、共通の枠組みのもとにロマン主義を捉えつつも、それぞれこの文芸思潮の異なった次元を強調するものだった。そしてこの両次元は、加藤にとって、最晩年に至るまでつねに重要なものであり続けるだろう。以下ではまず渡辺一夫の、ついでジャン・ゲーノのロマン主義論を検討していく。

中島健蔵のロマン主義論が51年の論文の発想源として明示されていることはすでに見たが、この中島の仕事が渡辺一夫との共同作業を契機に生み出されたものである事実を、まずは確認しよう。加藤は、「フランスの浪漫主義については、中島健蔵氏に、短いが示唆するところ多い優れた論文がある」として、二つの論文の表題のみを掲げている（「ロマンチックについて——前期ロマンチックの社会的背景」と「ロマンチズム以来のフランス文学の地盤」⁴²⁾）。この二論文は、1948年刊行の中島の論集『ロマンチックについて』を構成する四編に含まれているが、表題には若干のずれがある。一つ目の論文はたんに「前期ロマンチックの社会的背景」と題されているし、二つ目の論文は「ブルジョワジーと作家」を主題とし、「ロマンチズム以来の

42) 同書 295 頁。

……」は副題である。ここからわかるのは、加藤は論集『ロマンチックについて』の中にはなく、それ以前の初出においてこれらの論文を読んだということ、あるいは少なくとも初出においても読んでおり、タイトルを引くに当たってはそちらを参照したということだ。元来この二編は、1939年1月に渡辺一夫訳のゴーチエと併載されて、『ロマンチズムの誕生／ロマンチックについて』（青木書店）として刊行されたものだった（それゆえ、加藤が一本目を「ロマンチックについて——前期ロマンチックの社会的背景」としているのは、正確ではない。「ロマンチックについて」は、「前期ロマンチックの……」と「ロマンチズム以来の……」の二編に与えられた総題である）。渡辺は、テオフィル・ゴーチエ最晩年のこの回顧録（*Histoire du romantisme*）の翻訳と中島のロマン主義論を一冊にし、自ら選んだ19点に及ぶ「付録挿絵」を併せることで、「ロマンチズムという人間精神の切開手術にも譬えられるほどの重大な運動、^{ルネサンス}文芸復興の運動にも匹敵し得るような意義の深い運動⁴³⁾」への有益な導入の書をつくろうと望んだ。この本は、「ふらんすロマンチック叢書／Collection romantique」の最初の一冊として刊行されたのである。

敗戦後の1947年9月、渡辺は『青春の回想——ロマンチズム群像』として改訳を出版するが（角川書店）、そこには中島の論文は含まれていない。その一方——さらに後の富山房百科文庫版に付された渡辺一民の「解題」を引くなら——、「訳者解説に今日見られる『一』の部分が補加された⁴⁴⁾」。実際、39年版では著者の生涯の略述から始まっていた解説の冒頭に、訳者自身の思索が展開された、実に興味深い一節が付け加えられている。しかしこれは、『著作集』収録時の「附記二」によれば、39年1月の出版のために書かれたものようだ。戦後の諸版のこの「一」の部分を主として念頭に置き、渡辺はこう証言している——「38歳頃の私が、こんな姿をしていたという

43) 渡辺一夫「『青春の回想』（『ロマンチズムの歴史』）解説」、『渡辺一夫著作集』二宮敬・大江健三郎編、筑摩書房、第7巻、1977年、23頁。

44) 渡辺一民「解題」、ゴーチエ（渡辺一夫訳）『青春の回想—ロマンチズムの歴史—』富山房百科文庫、1977年、i頁。

ことを匿してはなるまいとも思ったので、僅かな字句の訂正だけを加えて、敢て旧稿のまま収録してしまった⁴⁵⁾。」つまり彼は、38年に執筆しながら公表を差し控えた原稿を、戦後になってあえて公にしたのである。それでは38歳頃の渡辺は、どのような姿をしていたのか。問題は年齢よりも、当時の時代状況である——「第二次大戦は、まだ始まっていなかったが、この年のヨーロッパでは『ミュンヘン会談』が行われていたし、日本では『国家総動員法』が成立した。刻々と暗くなっていく日々、悶々としていた私の気持が何かの形で現れているように思うが、文章の前半で、聖書などを引用して何か論じている箇所には特に、それが幼稚粗雑な文字で綴られている⁴⁶⁾。」

そこで引かれるのは、福音書が伝えるイエスと悪魔のエピソードである。イエスに名を問われ、悪魔は答える——「わが名はレギオン（＝軍団・大集団）。我ら多きが故なり⁴⁷⁾」。イエスは二千匹の豚に入り込んだ悪魔を海に溺れさせるが、このレギオン全体を滅ぼしえたのではない。渡辺はこのエピソードのうちに、「学芸に奉仕する人々」と「これを理解せぬ人々」の永遠の闘争の譬えを読み取る。「キリスト的な少数者と『レギオン』的な多数の人々との対立」は、様々に形を変えながら、歴史を貫いて展開されてきた。こうして、19世紀中葉にフローベールが生み出した薬剤師オメーに続き、同じ世紀の終わりにはヴィリエ・ド・リラダンのトリビュラ・ボノメー博士が、『レギオン』の長生と繁栄との実証」となる⁴⁸⁾。そして渡辺は聖書から借りたこの印象的な映像を参照しつつ、19世紀以降のフランス文学の歴史をロマン主義の展開として提示するのだった。

最初に指摘されるのは、ロマン主義を『世紀病』とか『憂鬱』とか『悲

45) 渡辺一夫『青春の回恋』（『ロマンチズムの歴史』）解説、前掲書26～27頁。

46) 同書26頁。

47) 同書18頁に引用（マルコ伝第5章）。

48) 同書19頁。なお渡辺一民が指摘するように（前掲「解題」iii頁）、当時の渡辺一夫はフローベール『聖アントワヌの誘惑』を翻訳刊行した後（1935年）、ヴィリエ・ド・リラダンについてエッセーを書き（『新潮』1938年12月号）、『トリビュラ・ボノメ』の訳書を上梓している（1940年）。

哀』とか、『絶望』とかいう主題⁴⁹⁾」のみによって理解することの一面性である。世紀前半の「ロマンチズムの明るさ⁵⁰⁾」を、彼は強調する。しかし、ユゴー『エルナニ』初演の1830年、ゴーチエが澁刺とした運動の活気を証言するこの年であってさえ、「既に硬化し始めた新興階級の俗衆の無理解と反撃⁵¹⁾」は見られた。そして受け手たる公衆の側に、いつしか文学者たちの一部も寄り添っていく。渡辺は19世紀フランス文学史を、次第に強大なものとなる「レギオン」を相手取る文学者たちの苦闘の軌跡として捉えるのである——「ロマンチズム文学以後の数々の文学運動の交替は、単なる流派の反動の繰り返しによるものではない。今仮にロマンチズム運動の若い闘士たちをキリスト的な存在とするならば、彼らを破綻せしめるほど強力な19世紀フランスの『レギオン』的存在に対する一段と経験に富んだ次代のキリスト的存在の再三に互る抵抗が、ロマンチズム文学以後の諸流派の精神となるとも言えるであろう⁵²⁾。」こうしてフローベールの暗鬱なリアリズムは、「こうした抵抗が、ロマンチックな『詩人の孤独』という慣用的主題の境を出で、個人の内面的な意識にまで聖痕を残し、この聖痕の故に作品が生まれた最初の例⁵³⁾」となる。二月革命以後にフーリエ主義の理想を断念したルコント・ド・リールもまた、「『レギオン』的なものに圧倒される苦汁を嘗めた」ために「不感不動の美の世界へ立てこもるにいたった」ものとされる。「美しい『象牙の塔』は、安易に作られた逃避所ではなかったのである」。こうして渡辺は、「『レギオン』に対する刻々と高まる意識的な抗争、そして絶望的な『脱走』、悲愴な『逃避』」によって19世紀フランス文学を特徴付け、そうしたすべての萌芽をロマン主義のうちに認める⁵⁴⁾。

こうした議論の枠組みは、渡辺訳ゴーチエに附された中島論文を引きなが

49) 同頁。

50) 同書21頁。

51) 同書20頁。

52) 同頁。強調原文。

53) 同頁。

54) 同書21頁。

ら、加藤が提示していた見取り図と合致する。しかしここには、加藤が中島の議論への「蛇足」と称しつつあえて付け加えていた要素は、まったく見当たらない。小市民との、労働者との、「人民」との、すなわち「レギオン」とは別のものとして捉えられよう多数者との結びつきの願いは、ここには不在である。それはゲーノのもとに見出される。

6 ロマン主義論の二源泉 (2) ——ジャン・ゲーノ

1929年から1936年にかけての『ウロープ』誌の編集長として、ロマン・ロランにより1923年に創刊されたこの雑誌を社会主義の方向へと牽引し、35年11月には週刊誌『金曜日』を創刊して人民戦線政権成立を支援した後、第二次大戦時にはレジスタンスに身を投じたこの「労働者の子⁵⁵⁾」について、加藤は——「象徴主義的風土」成立の引き立て役としてしかロマン主義を捉えていなかった敗戦直後にあっても——以下のように書いていた。「彼の人間存在の水平線には、コンドルセの『人間精神の一致』の観念が輝き、彼の心情の奥底には、ミシュレーの『人民の意識』と『浪漫的ユマニスム』とが溢れている……⁵⁶⁾。」1946年の『近代文学』誌を初出とする彼のゲーノ論は、やがて1951年9月、大幅な修正を施された上で、渡辺一夫によるゲーノの訳書に解説として収められる。渡辺は、ゲーノの1936年の論集『フランスの青春』(*Jeunesse de la France*)から、簡潔なフランス文学史「モンテーニュからジョレースまで」(« De Montaigne à Jaurès »)を翻訳刊行するに際し、「ゲーノの精神的思想的系譜を解明した熱気に満ちた紹介文⁵⁷⁾」たる

55) 加藤周一「ジャン・ゲーノと批評」、『フランス文学論Ⅰ』銀杏書房、1948年、151頁。

56) 同161頁(強調引用者。ミシュレについての評言は、以下を典拠とする：Jean Guéhenno, « Humanisme romantique : la jeunesse de Michelet », *Europe*, n° 56, 15 août 1927)。この箇所は「1946-1950」の日付を持つ修正版(渡辺訳ゲーノへの解説とほぼ同文)にもそのまま引き継がれている。加藤周一「ジャン・ゲーノ」、前掲『フランス文学論』、80頁。

57) 渡辺一夫「端書」、ジャン・ゲーノ『フランスの青春—モンテーニュからジョレースまで—』みすず書房、1951年、11頁。

加藤の論文を巻頭に掲げたのだった。「拙訳が加藤氏の論文の飾画ともなれたら、うれしいと思ったからである⁵⁸⁾。」では、加藤の論とともに読まれることとなったこの論文で、ゲーノはどのように19世紀文学を、またロマン主義を論じているのか。

彼はそこで、「ロマン主義の混乱そのもののほうに、古典主義の秩序や晴朗さよりもはるかに興味を感じずる⁵⁹⁾」と明言し、「シャトーブリアンやセナンクールやミシュレやルナンの如き人々の体験した精神的な悲劇は、今でも我々のものなのである⁶⁰⁾」と主張して、「文学革命が政治革命に結び合わされて⁶¹⁾」いた19世紀を、保守的な文学研究におけるロマン主義に対する偏見と戦いつつ読み直す作業を行っている。「ド・ボナルド氏の所謂『杖』、あの『杖』なしに歩き出そうとした⁶²⁾」人々の大胆な一歩によって、また「怪物を馴致する為には、その鉄鎖を除き去るより外にしかたがない⁶³⁾」とあえて信じた人々の勇気とともに始まったこの世紀に、「自己の手にゆだねられた人間は、遂に『生きむと試み』^{タンテ・ド・ヴィヴル}ようとする⁶⁴⁾」……。このような19世紀の端緒を「世紀病」によって特徴づけるのは、「生存に対する偏執」と「事業や野心で一杯になった生涯」で知られるシャトーブリアンその人に即しても誤りであるとゲーノは言う。「仮にヨーロッパが苦悩していたとするならば、それは発育という病気の為であった⁶⁵⁾」——すなわち世紀病の苦悩は、この世紀にとっていっそう本質的な別の病の、副次的な症状だったというのである。そして『アドルフ』は彼にとり、ロマン主義が「利己主義だとか、自我の高揚だとか」にとどまるものではないことを証言する書物だ。たしかに、「神々と信仰との死滅する瞬間に、宇宙に天涯無縁となった人間は、もはや

58) 同頁。

59) ジャン・ゲーノ『フランスの青春』、前掲書 78 頁。

60) 同書 79 頁。

61) 同書 76 頁。

62) 同書 81 頁。

63) 同書 90 頁。

64) 同頁。

65) 同書 83 頁。

自分自身だけにすぎるとはならず、外に道はなくなった」。しかしこの超越的秩序との切断の帰結として、「あらゆる人間の絆が、一入貴重に、神聖になってくる」ことを、コンスタンは感じたのだ⁶⁶⁾。「ロマン主義とは、自己の発見以上のものであり、それは他人の発見なのである⁶⁷⁾。」ここで直接に念頭に置かれている「他人」とは、自分を愛してくれるひとりの人間であるにすぎない。しかしロマン主義によって見出された他人は、より広く、限りなく広く、すべての人間を含むまでに拡大していく——「このような思想は、一体、政治的に、いずこへ到達すべきであったか？ 共和国である！ 民主主義である！ シャトーブリヤンやヴィニーの如き公卿さん^{シドヴァン}も、田夫野人たるミシュレやユゴーと同じように、一種の内在的な必然性によって、沁々とこれを感得し認容した。幸福を獲得する為には、人間だけしかたよりにならぬのではあるが、すべての人間をたよりにするのである。そして、この信念は、50年の間、増大する一ほうであった⁶⁸⁾。」ゲーノのロマン主義論は、訳者たる渡辺の強調する孤独な個人の顕揚の次元を欠いているのではないが、それよりもいっそう、集合的なものの要求の次元によって際立つ。

超越的な秩序への依存を断ち切り、現世における人間自身の営為によって永遠の幸福を獲得すること。ゲーノはこうしたメッセージをとりわけミシュレの仕事のうちに読み取る。既存の啓示宗教とは無縁のこの「永遠の福音書」こそは、「永遠の人間によって要求され、人間の最も恒常なまた最も本能に合致する福音書⁶⁹⁾」に他ならない。「我々は皆、我々のなかで個人性が滅び去るのを感じず。社会的一般性、人間的普遍性世界の普遍性の感情が、希くば再び抱かれ始めてほしい。その時、恐らく我々は再び神の御許に戻るのであろう⁷⁰⁾」——ミシュレ（『日記』1831年8月7日）がこのように定式化する非宗教的な新たな信仰は、ラマルチーヌにもユゴーにも見出しうるものだ

66) 同書 88 頁。

67) 同書 89 頁。

68) 同書 94 頁。

69) 同頁。

70) 同書 96 頁。

とゲーノは言う。

しかし、何より「共生の意志⁷¹⁾」によって特徴付けられるこの新たな信仰は、「1850年代に行方知れずになってしまったように思われる⁷²⁾」。まずは、2月革命に引き続く6月蜂起の破局があった——「当時いかにも感に耐えぬような調子で言われた『社会』というものが、勤労とパンとを、約束された品位と、それから結局は幸福とを求めるみじめな人民の姿を街頭に見た時、この『社会』は、恐怖したのである。『社会』は、銃殺し、投獄し、流刑に処した。これは『6月の挫折』であり、ミシュレは、そう言わねばならなかったのである。国民は二つに切断されてしまった。世紀もまたそうであった⁷³⁾。」ユゴーとはいえば、翌月の立法議会でこの分断を次のように表現するだろう——「今日民衆は、事実上生じた自らの悲惨と、権利の上から生じた自らの偉大さ、この二重の矛盾した感情を抱いて苦悶しているのです⁷⁴⁾」。そして以後、ルイ・ナポレオンのクー・デタと第二帝政の開始によって、新しい信仰は決定的に居場所を失うこととなって、「国家に反し政府に反抗し『社会』に反抗してのみ、なおも生きるより外に道はなかった⁷⁵⁾」。

こうして、「1850年以來、世紀はだらしな歩み方をした」のであり、「ルコント・ド・リールからマラルメにいたるまで、様々な逃走の道筋が見られるだけ」になってしまう⁷⁶⁾——ゲーノはこのように診断するが、とはいえこの逃避の道を、まったく価値なきものとみなすのではない。彼はそこに信念の強さの逆説的な表現を認めて、次のように述べるのである——「しかし恐らく我々は極めて手厳しすぎるのであり、こういう知性的経歴のなかにある筈の幻滅や嫌悪の量をあまり大きく見ていないのかもしれない。彼らが脱走したのは、極めて屢々これらの文学者を圍繞する現世に対する軽蔑の念

71) 同書 97 頁。

72) 同書 99 頁。

73) 同書 99～100 頁。

74) 同書 103 頁。

75) 同書 104 頁。

76) 同書 104 頁。

からであった。彼らの裡で、信念が、死滅していたのではないのである。信念が、絶望していたのだ⁷⁷⁾。」こうして、幻滅の中でも死に絶えることはなかった信念は、続く 20 世紀になって再び目覚めるのだとゲーノは言う。「大戦の前夜、希望は甦った。最も偉大な文学者たち政治家たち、ゾラ、フランス、ジョレースなどは、再び民衆の仄暗い集団のなかに身を投じて、新しい宗教の象徴を拾いあげようとした⁷⁸⁾。」

加藤周一の「浪漫主義の文学運動」は、ジャン・ゲーノを一度、ミシュレに関連して参照しているにとどまる⁷⁹⁾。しかし他ならぬこのミシュレの仕事重視し、「芸術のための芸術」の傾向を育むと同時に「人民」との結びつきを求めるをやめなかったロマン主義的精神が、やがてドレフス事件におけるゾラのうちに、また両大戦間期の諸作家のうちに甦るといふ枠組みそれ自体が、『永遠の福音』の思想と響き合っているのは明らかだろう。

7 「人間性への信仰」

渡辺一夫は、加藤の解説を付してゲーノの翻訳を刊行するに先立ち、1947 年のゴーチエ改訳に掲載した訳者解説の「一」においても、「モンテニュからジョレースまで」を参照していた。すでに見たように、この文章は最初の翻訳刊行に際して執筆済みだったのであり、それゆえ渡辺のロマン主義観は 1939 年の時点で、ゲーノを踏まえたものだったわけである。先ほど

77) 同書 105 頁。

78) 同書 106 頁。

79) 「貧しい印刷屋の息子」でありながら「コレージュ・ド・フランスの教授」となったこの歴史家について、加藤はこのように書いている——「ジャン・ゲーノ Jean Guéhenno によれば、彼は、民衆のことばを語ることに、努力を必要とした」（加藤周一「浪漫主義の文学運動」、前掲書 303 頁）。典拠は明示されていないが、念頭に置かれているのはおそらく、『永遠の福音——ミシュレ研究』の以下の一節である。「文化によって人民からの階級上昇を果たした若者たちに対し、彼は人民にとどまることを強力に勧めている。〔…〕彼自身が人民にとどまったのは、意志の力によって、またしばしば、自ら身に付けてきた文化に対する反発によってでしかなかった」（Jean Guéhenno, *L'Évangile éternel : étude sur Michelet*, Paris, Grasset, 1927, pp. 136–137）。

引いた「モンテニューからジョレースまで」の一節、ロマン主義と19世紀を「世紀病」の語によって特徴付けられる次元の強調から解放しようとして書かれた一節を、渡辺はこのゴーチエ解説で引用している（なお、そこでの訳文は47年の訳文とは若干異なっているし、指示されるページ数は原書のものであって、そのことからゴーチエ解説のこの部分が、ゲーノの翻訳刊行以前に書かれたものであることが察せられよう）——『「当時ヨーロッパ全体には、驚くべき生命が高鳴っていたのである。仮にヨーロッパが苦悶していたとするならば、それは発育という病気に罹っていたためであった』（『フランスの青春』95頁-96頁⁸⁰）。渡辺は1961年の『へそ曲がりフランス文学』（後に『曲説フランス文学』と改題）でもこの一節を踏まえ、「世紀病（mal du siècle）」の反面としての「成長病（maladie de croissance）」の次元を強調する形でロマン主義を論じており⁸¹、ゲーノの19世紀論が彼の近代文学史観の基本的な発想源であり続けたことがわかる。ゴーチエ解説に戻るなら、そこで渡辺がフローベール、ルコント・ド・リール、ランボーを引き合いに出しつつ「絶望的な『脱走』、悲愴な『逃避』」を語っているのは、「モンテニューからジョレースまで」の議論をやはり踏まえてのことだ。そしてこの脱走と逃避は、「ゲーノの所謂『発育の苦悩』」と結びつけられることで、世紀前半のロマン主義の冒険の帰結として理解されるのである。しかし、ユゴーとルコント・ド・リールを19世紀の二世代の代表とし、「第二の世代の人々のほうが、先輩たちの苦汁を知ればこそ、『レギオン』の恐ろしさをも第一の世代の人々よりも知っていた」と評する渡辺は、19世紀文学の展開を「『レギオン』に対する刻々と高まる意識的な抗争」として理解する一方で、レギオンとは別のものとして理解されうる多数者の形象を、この解説中で明示的に取り上げることはない。ゲーノ＝ミシュレの「エヴァンジェリウム・エテルネル永遠の福音」への言及も、ただそれを「信ずる人々の苦悩を外に乱舞狂喜妄動する新しい『レギオン』がいかに強力であるか」を訴え、1939年における「キリスト的な少数の人々」の困難を確認するためになされているに

80) 同20頁。訳書では83頁。

81) 渡辺一夫『曲説フランス文学』岩波現代文庫、2000年、247頁。

すぎない⁸²⁾。

渡辺はもちろん、「永遠の福音」がいかなるメッセージであるかを知らなかったのではないし、その価値を認めていなかったのでもない。『フランスの青春』への「端書」では、ジードの「個人主義的ユマニズム」とゲーノの「社会主義的ユマニズム」の二つが、以下のように対比的に論じられる——「個人なしには社会はなく、社会なくしては個人は生きられぬものにも拘らず、現代に於いて個人の尊厳なり自律なりは、社会の秩序なり安康なりと矛盾する場合を露呈する。この矛盾を解決する為のユマニズムが、ゲーノーにあっては社会改革の方向をとり、ジードの場合は、個我の絶対確保の道を辿る⁸³⁾。」しかしこうした集団的なものへの志向は、彼自身の議論においては必ずしも前景化されることがない。彼が敗戦後にも折に触れ強調したのは、文明的な「話し合い」を嫌い、『まつろわぬ者』どもを『ぶったぎる』ことを好む傾向が、「所謂保守党的な人々」と「共産党的な人々」の別なく集団的に共有されているような状況——すなわち「レギオン」的な集団性の執拗な存続——であり、そこでの少数者の運命である。「こうした愚劣な反動性を批判する少数の人々は、切なさのあまりに、政治や社会から逃避し、やむを得ぬ戯作者的境地に逃れ去るより外にしかたがなくなる。これは、今初まったことではない。昔から日本にあった悲しい事実である⁸⁴⁾。」渡辺はこのような知識人のあり方を肯定していたのではない。上記の文章と同じ1949年の別のエッセイでは、「今の世のなかのあらゆる善意の敵の一つ」としての「戯作者的な心構え」が非難されている。しかし彼は同時に、「人間への不信」を帰結しかねないこのような心的傾向を、自らの内部につねに感じ続けた⁸⁵⁾。

加藤周一は、晩年に敗戦後の渡辺一夫の日本観を振り返って、「言うことは一晩で変わったけれども内心は変わっていないだろうというのが渡辺さん

82) 渡辺一夫「『青春の回想』(『ロマンチズムの歴史』)解説」、前掲書19頁。

83) 渡辺一夫「端書」、前掲書15頁。

84) 渡辺一夫「暴力についてなど」、『展望』1949年9月号、24頁。

85) 渡辺一夫「戯作者の精神」、前掲『著作集』第11巻、24頁。

の考えかた」であり、それは「悲観的」なものであって⁸⁶⁾、その点で中野好夫と好対照をなしていたとしている。「渡辺さんは、戦争中は全然コミットしなかったけれども、戦後もコミットしていません。社会に対してコミットするかしらないかという点からみれば、渡辺さんはしない。中野さんはします。それが転換期に対する中野好夫の積極的な態度です。過去の十分な再評価・再検討を通じて現在の状況に、行動的に対応するということです⁸⁷⁾。」1951年の加藤のロマン主義論は、同じくゲーノを参照しつつも、渡辺が十分に強調しなかった側面からいっそうの示唆を受けて、敗戦後の新社会建設をより積極的に励まそうとしていたといえることができる。

こうした観点からすると、「象徴主義的風土」と同じ1947年に発表された「信仰の世紀と7人の先駆者」が、1951年の論文を準備する要素を見出しうる点で興味深いものとなる。そこでは、「軍国主義の時代に、文人の隠者的反政治主義は、政治一般に対する不信に変わった⁸⁸⁾」との診断のもと、この不信を新たな信念——何らかの「信仰」——によって克服することの必要性が説かれている。「焼跡で、建築の設計を行わず、設計そのものに対する懐疑に耽ることは、無意味だ⁸⁹⁾。」同年の象徴主義論と同じく、ここでもやはり、「信仰の世紀」としての20世紀は前世紀からの切断によって特徴付けられている。しかし、「カトリック詩人ボードレル」を特権的形象として掲げた「象徴主義的風土」とは異なり、ヴァレリー、クローデル、ブルースト、ジード、ペギー、アラン、ロマン・ロランの7人の信仰上の多様性を強調するこちらの論文では、カトリックの伝統から、さらには宗教それ自体の枠組みからも自由に、20世紀における信仰の問題が提起される。「私が、信仰の語を用いたのは、必ずしも宗教的意味に於いてではない⁹⁰⁾」

86) 加藤周一「中野好夫の生きかた」、『加藤周一講演集』かもがわ出版、第2巻、1996年、252頁。

87) 同書254頁。

88) 加藤周一「信仰の世紀と7人の先駆者」、前掲『著作集』第1巻、315頁。

89) 同書319頁。

90) 同書321頁。

——問題となるのは「人間性への信仰⁹¹⁾」であり、加藤はここで明らかに、『永遠の福音』と『フランスの青春』の著者を踏まえている⁹²⁾。

『著作集』収録の際の「追記」によるなら、この論文の狙いは、「歴史に超越的な経験と、歴史的社会的なかでの要請という二つの出発点」の統合不可能性の確認と、両者を「何らかの信条」によって結びつけることの提案にあった⁹³⁾。そして、この「信仰の世紀と7人の先駆者」で強調される「形而上学的超歴史的人間の発見と、社会的歴史的人間の必要⁹⁴⁾」とは、「浪漫主義の文学運動」においてルソーのもとに見出されるものに他ならない。1947年の論文では「前世紀の懐疑主義と歴史的相対主義とを粉碎し⁹⁵⁾」た20世紀の果実として提示される新しい信仰、「人間性への信仰」の形成を、19世紀の歴史的経験のうちにも見出し、二つの世紀を連続性のもとで捉え直すこと。1951年のロマン主義論は、このような視点の転換から生まれた。

最後に指摘しておかなければならないが、渡辺の戦中戦後を一貫するコミットメントの不在は、加藤にあって、必ずしも否定的に捉えられていたのではない。1998年に、彼はこのように回想している。「渡辺一夫先生は、16世紀のエラスムスとカルヴァンの対立する二つの立場を学んで、エラスムスに組みして居られたのでしょうか。16世紀の社会を動かす力は、もしかしたらカルヴァンのほうが強かったかもしれない。しかしカルヴァンは教条主義的です。敵を殺すこともある。そこまでいくか、それともエラスムスのように精神の自由と『寛容』を貫こうとするか。それは一長一短だと思う⁹⁶⁾。」明確なコミットメントの重要性を認める一方で、加藤は——憲法擁護の運動に身を投じた最晩年に至るまで——そこからあえて距離を取ることの意義を

91) 同書 323 頁。

92) 彼の名は一度、ミシュレを「ゲーノ Guéhenno の所謂浪漫的ユマニスト」として提示する際に現れる (同書 317 頁)。

93) 同書 326 頁。

94) 同書 312 頁。

95) 同書 314 頁。

96) 加藤周一・菅野昭正「戦争体験と異文化接触」、『加藤周一対話集』かもがわ出版、第3巻、2000年、141頁。

強調し続けた。「勇気凛々として陣頭に立つ人々に感心はするが、みずからそうでないことに、ほとんど全く後ろめたさを感じない⁹⁷⁾」——1972年1月の『朝日新聞』紙上で「さしあたり」表明されたこの立場は、加藤にあって決して全面的に打ち捨てられることがなかった。すでに確認した通り、47年の論文で20世紀を特徴づけるものとして見出され、51年の論文で19世紀からの連続性において把握されるものとなった新たな信仰、「人間性への信仰」は、本性上の不安定を条件づけられている。そして彼はこの曖昧な信仰を、何らかの堅固なものによって解消しようとの誘惑に屈することなしに保ち続けたのである。

8 おわりに

「釈迦の掌の中を飛びまわる孫悟空としてこれらの歳月を過ごしてしまったという感慨も誇張ではない⁹⁸⁾」——1970年代後半の阿部良雄は、自らのボードレール研究のすべてが「象徴主義的風土」の圏域に閉ざされているかのごときこうした誇張的賛辞を加藤周一に捧げる一方で、この風土からの脱却を企図してロマン主義の文脈の再検討に身を投じていた。こうして例えば、『七宝螺鈿集』の詩人はこのように論じられることとなる——「ゴーチエさえもサン＝シモン派のユートピア思想に興味をもったことがあったのではないかと考えられ、芸術無功利説の挑発的な極端さも、7月革命に期待を寄せた若きロマン主義者たちの理想主義的な期待の裏切られて行った位相に照応するものであったかも知れない。言いかえれば、『芸術のための芸術』と『社会的芸術』 l'art social とは必ずしも対立する両極端としてのみ捉えられるべきではなく、使命感が強いだけに挫折感も強く、社会・大衆に対する無力感を、使命から切り離されてもなお成立する〈芸術〉の絶対視へと転化せずにはいられぬところに、ロマン主義文学理念の弁証論を見るべきである

97) 加藤周一「私の立場さしあたり」、加藤周一『『羊の歌』余聞』鷺巢力編、ちくま文庫、2011年、324頁。

98) 阿部良雄「『象徴主義的風土』をめぐって」前掲月報5頁。

う⁹⁹⁾。」

さて、この「弁証論」はまさしく、1950年前後の加藤周一によって提出されていたものに他ならない。実際ゴーチエについて、彼もまたこのように述べているのだ——「やがて『藝術のための藝術』をとえたるであろうゴーチエその人が、そのときには、『野蛮な事実と不正な権力とに反抗し』、三色旗の下にたおれた『自由の聖なる殉難者 les saints martyrs de la Liberté』をうたう詩人の一人であった¹⁰⁰⁾。」阿部は上記の一節で、ポール・ベニシュのロマン主義論を参照している¹⁰¹⁾。これまで見てきたように、加藤が参考にしたのは中島健蔵であり、渡辺一夫であり、ジャン・ゲーノであった。さらには、1951年に白井健三郎とともに翻訳を刊行するサルトルの『文学とは何か』もまた、とりわけ文学者の社会的身分規定を論じる第3章「誰のために書くか」の分析によって、加藤の19世紀論を豊かなものにしてはいたはずだ。ベニシュが70年代以降に刊行していくロマン主義論を、阿部は同時代的に読んだが、加藤はおそらく読まなかった。その頃の彼はすでにフランス文学を主要な研究対象とすることをやめていたばかりか、ロマン主義であれ象徴主義であれ、ヨーロッパの文芸思潮を基準に日本文学を論じることもやめていたのである。しかし加藤は、1908年生まれのベニシュが激烈に生きた両大戦間期のフランスを、極東の軍事国家にあって最も熱心に読んだ一人だった。サルトル『文学とは何か』の枠組みを——やがて加藤にとっても重要な著者となるトクヴィルの仕事と並び——意識しつつ書かれた1973年の『作家の聖別』の議論が、20年先立つ加藤のロマン主義論と響き合うものを持っているとしても、驚くべきことは何もないだろう。

ところで、この時期のロマン主義論が興味深いのは、たんにヨーロッパ研

99) 阿部良雄「ロマン派の詩人たち」、前掲『フランス文学講座 第3巻 詩』、195～196頁。

100) 加藤周一「浪漫主義の文学運動」、前掲書298頁。

101) 後に刊行された訳書によって該当箇所を記す。ポール・ベニシュ『作家の聖別 フランス・ロマン主義1』片岡大右・原大地・辻川慶子・古城毅訳、水声社、2015年、499頁。

究の文脈においてのみではない。彼はこの時期、こうして得られた見通しを踏まえて、近代日本文学史の読み直しに着手していた。そこでなされていた議論が、フランス留学から帰った1950年代半ば以後の雑種文化論の圏域の仕事に、さらには1970年代以降の『日本文学史序説』の仕事に、どのように引き継がれているのか。この点の検討が、次なる課題となる。